

で計九万円ほど)を全額払い込みをしたが、これらも印税の末路と同じく、すべて敗戦と共にふいになつてしまった。しかし、未曾有の大戦争にほとんど全部の人々の受けた戦禍の中に、家族全員最も危険の多い大陸に、最も強烈な病疫の中に晒されながらも、一人の犠牲の悲劇も作らなかつたことを、幸いと諦めねばるまい」とある。

息子としてもまさに同感である。その後の健闘努力で就職や家族にも恵まれ、お陰様で無事定年を迎え、一家共々幸せである。

ともあれ、満州、中央奥地、内蒙古、北朝鮮、樺太、南方各地で大変な艱難辛苦に遭遇され、多大の犠牲を払われた方々に比べれば、私どもは沿岸大都市の敗戦だけに、まだ甘いものがある。今は亡き父母の大変なご苦労と、これまで健康で幸せに過ごせたことに、心から感謝したい。

結びに、祖国日本を愛し守り、今日の復興、繁栄、平和の礎を築かれた多くの先人に感謝申し上げ、ご冥福をお祈り致します。

私の終戦

大阪府 田中恵子

今年も五十五年目の広島原爆記念日が巡ってきました。毎年八月六日に広島市で行われる記念行事のテレビ中継を見ては、戦争は絶対にしてはならない、子供や孫たちを私が体験したあの悲惨な目に遭わせるようなことだけは、絶対にあってはならないと思うのです。あの戦争で、多くの方が何らかの犠牲を払われたり、不幸を招かれたりしておられると思うと、我が身を振り返って涙が自然と流れてきます。

私は、朝鮮の京城(現ソウル)で生まれました。当時は大日本帝国と言われていたところで、朝鮮にいた日本人はだれもが、日本人としての大いなる誇りを持って生活をしていました。

父は日本放送協会、今というNHKに勤務していた技師でした。母はいつも父の勤め先を通信局と言って

いました。その母も、通信局に勤める女子職員の指導教師として働いておりましたので、我が家は経済的にも余裕があり、一人っ子の私は何一つ不自由なく大事に育てられていて、周囲の家々と比較すると、羨まれるような生活をしておりました。家には、「オモニー」と呼ばれるお手伝いさんがいて、私をよく可愛がってくれました。

小学校は京城市内の青葉小学校で、山を切り開いた土地に、鉄筋コンクリート造りの大きくて立派な校舎が建っていました。両親に、よく「こんなに立派な小学校は、日本の内地では見かけられないよ！ 恵子は辛せだね。しっかり勉強しなければ駄目だよ」と言われていたことを思い出します。私も何の心配もなく元気に楽しく毎日通学していましたが、今思うと私の人生の中でも一番平和で、楽しく、幸福な時代でした。冬は、零下二十五度ぐらゐまで気温が下がりますので、学校の運動場に夜のうちに水をまいておくと、翌朝には立派なスケート場に変わっていて、全校生徒は休み時間とか、体操の時間にはここで滑っています

た。

京城時代が懐かしいあまりに、七年前にいとこと一緒にソウルに旅行して、かつての我が家の跡や、小学校の建物を探し訪ねたことがありましたが、私にとっては今でも京城に住んでいた時代の思い出を語る時が、一番心の安まる時です。昔の京城が私の故郷のようなものです。

小学校四年生の時に、詳しい事情はよく分かりませんが、父と母の間で確執があつて、夫婦生活がうまくいかなくなり離婚してしまいました。私は母に引き取られることとなつて、昨日までの平和で幸福だった生活から一転してしまいました。思い出を残して青葉小学校とも泣く泣く別れて、母の実家のある東京の世田谷の奥沢という所に行きました。

母は、厚生省に仕事を求めて勤めることとなり毎日出掛けていましたが、私は地元の小学校から帰ると、母が戻るまでひとりぼっちで家で寂しく過ごしていました。

小学校六年生の冬に、大東亜戦争が勃発しました。

それからだんだんと厳しい大変な時代になってきましたが、当初は戦勝気分が横いつしていて平穏な生活が続いていました。翌年の四月、私は同じ世田谷区内の田園調布にある、調布高等女学校に入学して女生徒生活が始まりました。

しかし、調布高女での女学生生活も長くは続きませんでした。母の弟が上海で運送会社を経営していて、戦争中には日本軍の仕事も引き受けるようになって、上海を中心に四カ所に支店を持っていました。忙しくなって全部の支店の面倒を見ることができなくなり、その支店の一つで上海駅のそばにある店を母に任せるといったことになり、今度は親子で中国の上海に渡るようになったのです。私は、京城時代の楽しかった思い出があるので、東京から上海に渡ること何とも思っています。かえって夢と希望をもって喜びました。

昭和十八（一九四三）年の夏休みに上海に渡りました。学校は上海第二高等女学校に転校しましたが、この学校も非常に良い環境の所にあつて、きれいなピン

ク色をした校舎で女学校らしい雰囲気を持っていました。また、先生方も良い方ばかりで、調布高女と比べてもそんな色のない陣容でした。周囲は知らない人ばかりでしたが、同級生をはじめ、先生方や事務職員の方々にも親切に優しく迎え入れてもらい、少しも嫌な思いもなくすぐに学生生活に解け込み、楽しく通学していました。

大東亜戦争の戦局も、二年生の後半頃からだんだんと厳しくなり、それに伴って女学校でも日常の教科に教練がとり入れられて、軍の方からも指揮官が来て、竹やりを銃の代わりにして執銃訓練や、突撃訓練などが始まりだんだんと軍国主義調になってきました。

女学生の服装もスカートが駄目になり、上着はブラウスでも下はモンペになり、防空頭巾を肩から掛けて通学するようになりました。上海にはまだB29などによる空襲はありませんでしたが、新聞やラジオで見たり聞いたりして日本内地の各都市での大空襲の様子を知るたびに、「東京から上海に移って来て良かったね」と、母と話したものです。しかし、警戒警報はしょつ

ちゆう発令されていきました。そのたびに緊張していきました。

通学路の途中に海軍上海陸戦隊本部がありました。その前を通る際には、班長の上級生が号令を掛けて列を整頓し、「頭ら、ならい！ 礼」と、門の前で警備に立っている水兵さんに対して、お辞儀をしながら門の前を行進して通っていました。まだ、日本が負けるなどということは夢にも考えられない頃でしたので、日本の強い陸海軍の兵隊さんには感謝の気持ちを抱える毎日でした。

三年生になると、学徒動員令によって学業を放棄して、軍需工場や軍の施設などに動員される事態になりました。

私たちの上海第二高女の生徒は、軍需工場には行かずに、学校で、兵隊さんが携行する弾入れや、軍服のミシン縫いや、軍服のボタンホールの穴かがりなどの作業に一生懸命に励みました。乙女心にもお国のために少しでも役に立ちたいという一心で、毎日毎日頑張っていました。

そのうちに学校からの推薦で、通信隊要員に指名されて、必要な通信知識や、通信技術などの勉強を命ぜられ一生懸命に努力しました。軍国主義の教育を受けて育っている時代の人は、老いも若きも戦争に勝つまでは石にかじりついても頑張ろう、という精神でみなぎっていましたので、女でも天皇陛下のために働けるのだという充実した気持ちが張りつめていました。猛勉強をした甲斐があり、試験に合格しました。

八月には指名された任地に向かって出発することとなり、私はこれで日本のためにお役に立てると張り切っていました。母は一人娘が軍隊に取られてしまうということ、大層悲しく思っていたようです。

戦争の実情は、一般の人々に知らされないうちに段々と悪化していったようですが、私たちはいつか勝利の日が来ると期待をして、毎日ミシン踏みで頑張っていました。上海でも日常生活の必需品が次第に少なくなり、窮屈になってきましたが、それでも話に聞く日本内地よりも豊かでした。砂糖でも、バターでも、メリケン粉でも必要最小限の物には事欠くことも無く過

ごしていましたので、日本はまだまだ戦えるという気持ちでみなぎっていました。しかし上海にいる中国人の様子は、何となく変化があるようにも見受けられましたが、まさか日本が負けるなどということは考えられませんでした。

しかし、とうとうあの昭和二十年八月十五日という忘れられない日を迎えることになりました。思いもよらぬ事です。

前日に、「明日、正午から重大放送があるので、それぞれの家庭で拝聴するように」という連絡がありました。何事だろうか、ちょっと気に掛かりましたが、それ以上はあまり考えませんでした。周りの人々も皆落ち着いて、普段と変わらない行動をしていました。

八月十五日正午、雑音ばかりが大きく強く入っていて全体はよく聞き取れませんでした。初めて聞く天皇陛下のお言葉であることは分かりました。天皇陛下からの直接の終戦のお言葉だったのです。日本は負けってしまったのです。ラジオの前で泣きました。今の今

まで、勝つまではと気持ちを張りつめていたのに。負けてしまって、途端に全身から力が抜けてしまい、その場に泣き崩れてしまいました。しばらくは身動きもできませんでした。このとき初めて虚脱感というものを、身を持って体験しました。

これから先どうすればよいのかと、母と二人でその夜はまんじりともせずに考えました。日本内地に無事に帰れるのだろうか、このまま上海で一生を奴隷のように過ごさなければならぬのだろうか、それともどこかに強制的に連れて行かれるのかなどといろいろな妄想が、次から次に頭の中を去来していました。悪い事態ばかりが頭に残りました。そうなると、どうにもなれ、何とかなるだろうという居直った気持ちになり、やっとう心が落ち着きました。

学校は八月九日から夏休みになっていましたが、すぐに学校に行きました。先生方も混乱していて何の指示もなく、家で待機することになりました。その後しばらくの間、学校からの連絡はなく、気が気でありませんでした。上海市内では刻一刻と様相が変わり緊張

が高まっていました。特に、中国人の日本人に対する態度が、手の平を返すように変わってきました。街では青天白日旗を打ち振って騒ぎ始めました。昨日まで、母を助けて運送会社の仕事をして働いていた人たちまでも、敗戦によって会社の仕事がなくなり自分たちも食べられなくなると思ったのか、毎日百人以上の中国人の従業員が、事務所や我が家に朝早くから夕方日が暮れるまで押し掛けて座り込んでいました。石を投げたり戸を叩いたりして、嫌がらせをしてわめき散らしながら、「金を出せ!」とか、「生活費を払え!」などと言って騒いでいたので、恐怖のどん底でした。

家では昼間でも窓は全部ふさいで、家の中で電灯をつけていました。もちろん外出は全然できずに、食べることも不自由していました。暗くなって集まっていた従業員たちが退散した後、家にいたアマさん二人が恐る恐る街に出て食糧を買い求めてきたので、なんとか飢えることなく過ごすことができました。

従業員たちの言うこともよく分かるのですが、預貯金などは全部、中国側によって差し押さえられていて

自由にならず、賃金を払おうと思っても、現金は会社にもほとんどないのでどうしようもありませんでした。母も随分と悩んであちらこちらの知り合いなどに頼んで現金を集めていましたが、どちらも事情は同じで、従業員に支払うには到底及ばずどうにもなりませんでした。そんな状態がしばらく続き、私はまるでモグラのように家の中に閉じこもったまま、薄暗い電灯の下で昼も夜も過ごす生活でした。

母と叔父は、中国政府側から呼び出されて、戦前・戦中に請け負っていた三菱商事と日本軍の仕事の内容などについて、根ほり葉ほり執拗に調べられています。この取り調べだけで済むと思っていた矢先、ある日、突然に中国軍の憲兵隊員が来て叔父を連れて行ってしまいました。予期していなかったことで、家族の驚きは大変でした。特に一緒に仕事をしていた母のショックは大きく、そのときの動搖は、筆舌に尽くせないくらいでした。叔父はどこに連れて行かれたのか音信不通となり、いつまでたっても帰って来ませんでした。もしかしたら銃殺でもされたのではないかと話

し合い、家族の心配は一通りではありませんでした。

それからの母は、あまりにもショックが大きかったのか、体調を崩してしまい起きていることが苦しくなり、床に就いてしまいました。そのうちに下半身の神経が、麻痺してきて、自分の力で体を動かすことができなくなってきました。このままにしておいたらだんだん悪くなるばかりだと思い、周囲の方々いろいろな心配して頂き、当時まだ開業していた上海市内の中山病院に入院させることになりました。

それからは、私が付添人として病院に行くこととなり、昼間は病院で母の看護をして、夜は家に帰って寝るといふ生活になりました。二人のアマさんがまだ我が家に残ってくれていて、食糧の買い出しなどには行ってくれましたので、食べることに心配しませんでした。母には栄養のあるものを十分に食べさせたいと思ってもなかなか手に入らずに、悲しい思いをしました。症状はだんだんと悪化して、下半身が全然動かなくなりました。

母は、病状が進むに従ってだんだんと弱気になって

きて、日本に帰ることだけを心の支えにしています。毎日、私と顔を合わすとそのことばかりを口にしていましたが、私はどうすることもできずにただ、「もうすぐよ！早く良くなって日本に帰りましょう。頑張ってね！」と言うだけでした。

二人のアマさんも、私たち親子のことを見るにいかねていたのか、心配して家に来てくれました。私が病院にいる間でも危険を覚悟のうえで、市街に出ては栄養のある物を探し求めて食べさせてくれましたが、さすがの上海も、政情不安から生活必要物資がだんだんと欠乏し、特に食料品が少なくなり、値段も高くなってきました。その反対に、手元にあるお金は日に日に減ってきて、先行きに不安を感じるようになってきました。経済的な面からも、一日も早く日本に帰りたいと思う気持ちでいっぱいでした。

しかし、上海からの日本人の引揚げはなかなか開始されずに、とうとう昭和二十一年の正月も上海で迎えることになりました。

三月になって、待ちに待った日本からの病院船の到

着について、病院の事務室から連絡がありました。その内容は、近いうちに病院船が来て、患者を優先的に収容して帰国するから、今から準備をしておくようにということでした。日時はまだ示されませんでした。これで近いうちに母を連れて東京に帰れると思うと、今までの打ち沈んでいた気持ちに、パッと光が差し込んだようになりました。

母も、そのことを知ってからは「今日か！ 明日か！」と、指を折って数えていました。食欲も少しずつ出てきて顔色もうっすらと赤みを帯びて、心なしか元気が出てきたように思えて、私もほっとしたものでした。しかし、相変わらず下半身は動かすこともできずにベッドに横たわったままでした。この状態では、どのようにして船に乗せるのかなど、移動方法を心配していました。

私は母の看護をしながら、夜には家の中の整理を始めて、携行する荷物をまとめて、いつ船が来ても良いように準備をしました。母の分と私の分と、荷物は二人分ですが持つのは私一人ですので、区分けするのに

随分と苦勞しました。ほとんどの家具・家財・寝具・衣類・台所用品等は、二人のアマさんで分けるようにしてもらいました。

これで、いつ病院船が来ても良いように準備万端整いました。が、肝心な病院船がいつ来るのかは、その後の連絡もありませんでした。上海の冬も何とか無事に乗り切ることができて、春を迎えようとしていた三月末に、やっと病院船の入港が決まり、集結場所集合するように連絡がありました。荷物は一人三十キログラム、所持金は一人千円という指示でした。あまり欲張って大きな荷物を持っていて、検査で引っ掛かって他の人に迷惑を掛けてはならないと、整理してあった行李を再びほどいて入れ直しをしました。が、結局何も捨てきれずに、再び前とほとんど同じような重さになってしまいました。それでも母の分と一緒にすから、当座必要な衣類と下着類ばかりでした。これで日本に着いてからどうするのかと考えましたが、考えたところはどうしようもなく、あきらめの境地でした。

集結場所は、上海のウスン港の岸壁でしたので、私

は家から出発し、母は病院から担架に乗せられて運ばれました。これでいよいよ日本に帰れると思うと、気持ちも高ぶって落ち着きませんでした。病院船はまだ来ていませんでした。病院船が入港するまで、岸壁の前にある倉庫のような建物に收容されることになりました。集結した人は、みんながっかりしてしまいました。すぐに乗船できるという期待が、一遍に消えてしまったのですから無理ないことです。天井は高く、床はコンクリート敷きでした。そこに病人も普通の人も一緒に收容されましたので、母は大変に苦しみました。食事も粗末な物で、とても栄養などは取れずに、数日すると病人は皆弱ってきました。顔色も良くなりつつあった母も、ほとんど食べ物が喉を通らずに、また悪くなってきました。

母は下半身が麻痺しているのに、排泄する感覚が無いのでオムツをしていました。私は收容所で、毎日朝から晩までオムツ洗いと、下の世話で過ごしていました。だれも知る人のいない中で、十八歳の女一人で随分と心細いことでしたが、皆さんにいろいろと親切に

してもらっていました。

收容所での待機生活が一カ月ぐらい続きました。その間、何の治療も受けられない病気の人々は衰弱するばかりで、母も極端に弱ってきました。

忘れもしない、昭和二十一年四月二十九日に、やっと病院船に乗ることができました。船の名前は、確かリバティー船だったと思います。日本からの医師と看護婦さんが迎えにきて、すぐに担架で運び船内の病室に入り、早速診察を受け治療が始まりました。一カ月も風の吹き通る建物の中で、しかもコンクリート床の上に、薄いござを敷いただけの所に直接寝かされていたのですから、体全体が極端に弱ってしまいました。それでも母は、やっと日本の船に乗り、日本人の医師や看護婦に診てもらうことで、随分と安心したようでした。

しかし、手厚い看護を受けても衰弱しきった体は回復しませんでした。五月一日の夜八時三十五分に、五十四歳の生涯を寂しく終えました。引揚げ病院船での死亡者第一号でした。母はきつと、日本の病院船に乗

せられて、これで待ち望んでいた日本に帰れたのだと安心したことでしょう。あまり苦しみもせず息を引き取ったのでした。

私は、とうとう天涯孤独になってしまいました。しかし、気が張っていたのか、こうなることをある程度予想していたためか、それともしつかりしなければ駄目だという気持ちの方が勝っていたのか、いずれかは分かりませんが、あまりショックも受けずにそれからのことを冷静に処理していました。

翌朝、八時半ごろに水葬の式をもって母は葬られました。船の上甲板から海に向かって滑り台のような物の上に母を乗せ、両足首はしつかりとロープで結わえ付けられ、体は毛布で包まれてロープで結んで海に落としました。「ボー」という静かで長く尾を引くような汽笛を一回鳴らして、船は離れていきました。このときに初めて、「ああ！ 母は死んでしまったのだ。かわいそうに。波乱の人生だったが、まだやりたいことをたくさん残したまま死んでしまったのだ。私一人を残して。私はどうすればいいの」という思いが一度

に込み上げてきて、涙がとめどもなく流れ、大声を出して泣きました。いくら泣いても、泣いても泣き止むことができませんでしたが、船長さんや、看護婦さんに促されて船室に戻りました。

母の髪の毛と爪を、小箱に入れて持ち帰りました。船長さんからは、母の水葬場所は五島列島の付近だと教えてもらいました。何十年もたった今でも、あのときの様子を忘れることはできません。

病院船には、中国の奥地で負傷したり病気にかけたりして、上海などの病院に後送されていた兵隊さんがたくさん乗船していましたが、この方たちの中にもやっと日本に帰れるという安心感からか、乗船してすぐに症状が悪化し、懸命な手当の甲斐もなく死んでしまった方が二十数人おられました。母と同じように水葬されましたが、水葬までの間、船内の狭い通路に毛布で包まれて置いてあり、人々はその横を歩いていました。何とも言えない悲しいことでした。懐かしい故郷を目の前にして、亡くなっていった兵隊さんたちの気持ちは、母と同じように悔しくて無念やる方ないこ

とだろうと思いました。

数日の航海は、穏やかな日もありましたが、玄界灘に入ると激しい波浪のために、船は縦、横に揺れて、それこそ立っただけでも横になっていても苦しくて、吐き気を催しながら過ごしていました。どのくらい航海していたか、正確な記憶は薄れてしまいました。が、やっと九州の諫早港の沖合いに停泊しました。すぐに港に横付けされて上陸できると喜んでいましたが、船内に伝染病患者が多数出たので、患者さんの菌が出なくなるまで上陸禁止となり、来る日も来る日も船の中で過ごし約一カ月も留められました。何となく気持ちが悪く感じました。船内の兵隊さんも、内地に帰れた安堵感と、いつ上陸できるのか分からないという焦慮感とで、気が立ってききました。

彼らは、私が娘でしかも親のいない独りぼっちの引揚者だということが分かると、私を見て甘い言葉をかけて誘惑してくるようになりました。始めのうちは言葉だけでしたが、そのうちにいやらしい態度で私に向かって来るようになりました。私もだんだんと恐くな

り婦長さんに泣きついて相談しました。

その婦長さんは、米多比九十九(メタヒツクモ)さんという久留米出身で九州医大から派遣されてきた看護婦さんで、ちょっと、男の人のような感じでしたが優しい方で、私を守って下さることになり、いつも一緒に行動していました。聞くところによると、当時三十六歳だったので威厳があり、さすがに気の荒くなっている兵隊さんも婦長さんには一目も二目も置いていたので、婦長さんと一緒にいると、私にも口出し手出しをしなくなりました。

やっと禁足が解かれて上陸できるようになりましたが、私は母がいないので引き場げる先がはっきり分からないので、あちこちに照会をする間、諫早の引揚援護局でお世話になることとなりました。その間にも婦長さんは、暇があると私のところに来て見守って下さいました。後に、私が東京に行くとなった時も、わざわざ上野まで送って下さいましたが、私は、この方に助けていただいたお陰で、日本に帰って来ても何事もなく無事に生き抜くことが出来たのです。私を送って

から、再び引揚者や中国人のために働くのだと言って旅立たれました。今、どうしておられるか分かりませんが、感謝の気持ちは忘れません。

三カ月間、援護局でお世話になりましたが、局の皆さんにも親切にいただき、日本に帰った有り難さを感じました。東京には亡くなった母の妹や、親類がいるはずと申し出て、いろいろと調べてもらいましたが、まだ疎開先から戻っていませんし、どこに疎開しているか分からないという返事や、空襲で焼けて消息不明という返事ばかりでした。私も手紙を出したのですが全部戻ってきませんでした。こうなったら東京に行って自分で探すほかないと考えると、婦長さんとも相談して決心しました。援護局にも、いつまでも甘えていることはできませんでした。

上海から持ってきた私の全財産の入っている行李は諫早の駅に預けましたが、駅の倉庫が泥棒の集団に襲われて、私の行李も盗られてしまいました。私は何もなくなり身一つとなりました。後日、空になった行李だけが岩手に送られてきました。

東京に着いてすぐに、うる覚えのまま世田谷の奥沢に行き、叔母のいた家を訪ねましたが、もちろん叔母はいませんでした。近くの方に事情を話して疎開先を聞いたところ、岩手県の山の中だということが分かりました。私は意を決して、上野駅に行き東北本線に乗りました。東北は旅をしたこともないので全然未知の路線で、いわば手探りの冒険でしたが、何としてでも叔母に会わなければという一心で、後先の考えもしない行動でした。今、思い返してみると、よくやったなと自分で自分に感心しています。

やっこの思いで、金田一温泉駅に翌朝六時頃に着きました。当時は、上野からここまで約二十一時間もかかったのです。駅で教えられてバスに乗り一時間ぐらい揺られて、やっとう晴山村というバス停で降りました。そこは、岩手県九戸郡晴山村という山奥の寒村でした。すぐに村役場を訪ねて事情を話して、東京から疎開していた叔母の所を教えてくださいました。やっとう叔母の家にたどり着きましたが、体はくたくたに疲れしていました。叔母一家は、一人で引き揚げてきた私を

見て、びっくり仰天という形容詞がびたりとするような驚きぶりでした。私はやっと体内の者に囲まれて、今日までの精神的、肉体的な疲れを癒すことができました。翌年の春まで、叔母一家の一員として生活しました。

この部落は、十数軒ぐらゐの農家があるだけの静かなところで、叔母家族二組が疎開者として住んでいました。叔母は、村のために精米所を開設して生活していましたが、翌年の春には東京に戻りました。私は、叔母の残していった精米所の仕事と、養豚の仕事を引き受けることになり一人残りました。精米も養豚も、もちろん私にとっては素人であり何をどうしたら良いのか全然分からない仕事でしたので、村の若者を一人雇って二人で頑張ることになりました。

朝七時から夕方の五時まで、それこそ汗と粉にまみれての働きでした。小豚は二十貫目（約八十キログラム）ぐらゐまで大きく育てて、月一回開かれる市に出して売り、売上金は叔母に送金していました。春から秋は季候も良く仕事をしやすいのですが、冬は大変で

十一月から三月までは、雪が毎日のように降り道路も積雪で塞がれて、バスも時々しか通らず、訪ねて来る人などだれもいなく寂しい思いをして暮らしていました。寒さも厳しく辛いことでしたが、働くことで寂しさを紛らわしていました。でも土地の人は皆親切で、私の身の上もよく知っているのです、そっと見守ってくれました。

そのうち、上海で別れたままの叔父一家も無事に引き揚げて、静岡に落ち着いたことを知りました。春になってから叔母に頼んで山を下り、今度は静岡に行き叔父の所で世話になることになりました。静岡では女中のようになって働きました。静岡での三年間は、私にとって本当に辛い人生でした。働いても、働いても報われない日々でした。親がいないということは、本当に惨めなことだと実感しました。両親はいなくてもせめて母親がいてくれれば、どんなに苦勞をしていても気持ちのうえからは楽しいことだろうとつくづく思ったことでした。

叔父は、アメリカの進駐軍から砂糖やコーヒーなど

の横流れ物資を買ってきて、それを街の喫茶店に売り歩く仕事をしていました。十九歳になっていた私もこの仕事をやらされましたが、恥ずかしくてなかなか上手にできずに悲しくなっていました。また、古着を集めて田舎の方に売り歩き、お米に替えて来るような仕事もさせられました。夕方になるのになかなか分けてもらえず、家に帰ることもできず困っていると、ある家の親切なおばあさんが声を掛けてくれて、「お嫁さんに行く家があるからそこに行ってみなさい」とその家を教えてもらい、そこでたくさんのお米と交換していただき、重たいリュックサックを背負って帰る時は本当に嬉しくなり、足取りも軽く、家に帰っても叔父から褒められ、ほっとしたこともあります。そんな辛苦して帰ってきてても、すぐに家事が待っていて休む暇もなく台所に立っていました。

上海時代に、女学校を卒業したら将来は薬専に進みたいと希望をもって、母とも話をして了解してもらい、一生懸命に勉強していたことを思い出しました。敗戦によって母を亡くし、女学校もそのまま中退

してしまい、夢は破れ、こうして人様のお世話になりながら働き続けなくてはならない自分を見つめ直し、情けなくて布団の中でよく泣いたものです。

叔父はさらに、静岡名産のお茶やミカンを長野県伊那地方に売る仕事もしていましたので、その仕事も手伝わされました。伊那にお茶やミカンを売りに行った帰りには、信州リンゴや米を求めるのですが、貨車に紛れ込んで帰ることもありました。叔父が警察に捕まり留置されていた時などは、静岡と伊那を行ったり来たりして一カ月ぐらい続けたこともありましたが、弁護士さんを頼んで叔父を助けたこともありましたが、考えると良くやったものです。

そのうちに体調を崩し、叔父の家に世話になることが、辛くて情けなく、そして悔しくなり、人に頼ることとは駄目だと思いつくづく考えて、死ぬ気でやればまだ若いだから何でもできると思い返し、一人で頑張ろうと決心して家出をして神戸に行きました。特別に神戸に目的があったのではないのですが、関西と想っているうちに神戸に着いてしまったからです。すぐにその

足で神戸の職業安定所に行き、就職先を探しましたところ、大学の先生の家の女中の口がありましたので、すぐにそれに応じました。女中は、住むところがあるので第一条件でした。静岡でも同じようなことをしていたので自信がありました。そこで一生懸命になって働きましたが、そのうちにその大学の先生が、「家内と別れるから、私と一緒になってくれ」と言い出しました。私は、「小さい子供さんが二人もおられるのに、よその家庭を壊す気はありません。今日限りで辞めさせて下さい」と申し出てその家を出ました。住み込みはもうこりこりでしたので、市営住宅の三畳一間を借りて、関西帆布という会社の事務員として就職しました。月給は四千円で、そのうち家賃に二千円取られて、残り二千円が一月月の生活費でした。貧乏でも自由がありました。自分の考えで毎日生活できることが、一番嬉しいことで幸福でした。

この会社で主人と巡り会い結婚しました。主人はエンジニアで、和歌山の旧家の長男でした。私は、引揚者で親もなければ財産もない身分でしたので、周囲か

らは随分と反対されました。私も、そうだと思いついて結婚したい」と言って、私の住んでいる近所に移ってきました。それを知り、私も二人で力を合わせて立派に生きていこうと決心し、昭和二十六年四月二十六日に、神戸の湊川神社の神前で、神主さんにお祈いをしてもらおうというだけの式でしたが結婚しました。

小さな三畳の部屋で、鍋一つ、薬缶一つでの出発でした。主人は、自分の進みたいと考えていた外国銀行に就職するために関西帆布を退職したので、生活は大変でした。夜間の専門学校に通うため、学費もいるので随分苦労しましたが、六カ月後に香港上海銀行神戸支店に入社することができました。私も本当に嬉しく、感激しました。

しかし、そのために体も随分と無理をしていたのでしよう、入社三カ月目に主人は結核にかかり、医師からは休職三カ月と診断され、どうしたらよいのかとほとほと困りましたが、私の力ではどうしようもなく、主人は両親にお詫びを入れて和歌山に戻り療養するこ

とになり、私も一緒に行きましたが、百姓の仕事も手
伝わなければならず、病人の看護とで苦勞しました。

和歌山での生活も四カ月で終わり、主人はどうにか
勤められるようになり復職しましたが、それから毎日
毎日ひやひやしなからの生活が続いていました。

やっと主人の体力も回復したので、結婚後五年目に
出産して長女をもうけ、その五年後に次女が生まれま
した。主人も無理をせずに、家族のために一生懸命働
いてくれました。私たちは裸一貫から出発し、家も建
て子供も結婚して孫もできて、やっと人並みに楽しく
平和な生活ができるようになりました。しかし、主人
は四年前に急性骨髄性白血病で、七十三歳の生涯を終
えました。

振り返ると、人生は長いようでも短いようでもあり
ます。毎年八月十五日の終戦記念日を迎えるたびに、
たくさんの方が亡くなり、そして残されたたくさんの方
が、それからの人生をそれぞれの力で、強く、正し
く生き抜いておられることを思うとき、二度と戦争が
起こらないよう、平和な国であり続けることを願うの

みです。

私はあの苦しい時代に信仰の道に入り、悩める人を
救うために努力精進をし、どんなに辛くても明るく正
しく前向きに生きてきました。

苦勞のままで死んだ母が、私を強く生き抜く女とし
て導いて下さったことに、本当に心から感謝をして毎
日を過ごしています。

世界が平和で、人々が幸せな日々を送ることができ
るよう祈り続けます。